

福勝院の跡地に関する一考察

松永 修平

1. はじめに

筆者は、2020年7月から12月まで福勝院の推定地と考えられている京都市立近衛中学校の南東部で発掘調査を行った。福勝院とは、鳥羽法皇の皇后で、藤原忠実の娘である藤原泰子（高陽院）の御願として、白河に建てられた御堂のことである。『本朝世紀』仁平元年（1151）6月13日条に「…高陽院令供養白川新造堂給。…」とあり、『百鍊抄』の同日の条「高陽院供養福勝院」とあることから、供養は仁平元年（1151）に催され、その寺院が福勝院であることがわかる。また『兵範記』には、久寿2年（1155）に土御門殿で崩御した藤原泰子の福勝院までの葬送行程が記されており、御堂の南西門から敷地内へ入ったとあるので、福勝院の敷地が近衛大路末に南面していることがわかる¹⁾。この葬送の記事の後には、福勝院が熊野神社の四至の内に建てられたことが記されている²⁾。また、福勝院が史料に最後に登場するのは弘安10年（1287）³⁾で、その後については不明である。

この福勝院の位置に関しては、上述したような史料や絵図などから推測がなされてきた。杉山信三氏は、これらの史料に加え、『京都坊目誌』に「字一町が辻西南の地也、古へ方一町の所とす」と記載されており、京都大学教養学部南部の吉田寮一帯および近衛中学校の字名が「一町が辻」であることから、『京都坊目誌』の記述に無理がないものと考えている⁴⁾。また、その規模に関しては、『兵範記』仁平2年8月28日の記事に記載されている御堂の図面（図1）やその他の史料から、全体の規模を考えるために必要な項目として、「北山麓」あるいは「御塔北山麓」・「北中門西廊」・「同東廊」・「南中門東歩廊」・「鐘楼南子午廊」・「西御堂」を抽出し、福勝院は方一町に収まるものと考えた⁵⁾。

川上貢氏は、前出『兵範記』の葬送記事に加え、熊野神社の境内四至が、応永3年（1396）將軍義持が熊野神社境内管領を聖護院に命じた文書から、「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原（除崇徳院、大吉祥院敷地）」とされ、また、吉田神社の境内四至が永徳4年（1384）の將軍義満寄進状から、「東は神樂岡山の西、南は近衛末、西は河原、北は土御門末」とされていることから、福勝院が近衛以南に位置していた可能性も考慮している。ただし、これら両神社の四至は、室町時代に設定されたもので、平安・鎌倉時代まで遡らなければ支障はないとしている。そのため、位置に関しては確定的な要素が足りず、吉田近衛町の範囲と推定するに留まっている。また、規模に関しては上で挙げた『兵範記』の御堂の図面から、堂の桁行が154尺（46.2m）以上となることから、敷地は方一町では収まらなないと推定している⁶⁾。

濱崎一志氏は、福勝院の位置に関して、基本的に杉山信三氏の説を追認し、近衛大路末の北、今朱雀の東側、現在の京都大学総合人間学部南部と比定しているが、室町時代の吉田神社・熊野神社の位置から、熊野神社の北限が南に下がったのでなければ、福勝院は近衛大路末より南に比定する

必要があり、この件に関しては今後の課題としている⁷⁾。

吉江崇氏は、『京都坊目誌』の記述と、18世紀後葉から19世紀初頭にかけて作成された『山城国吉田村古図』に記される壺丁ケ辻、そして壺丁ケ辻の南西に描かれた法光院という小字域に注目した⁸⁾。そして壺丁ケ辻が近衛大路末の北、鷹司小路末の南に広がっていることと、法光院という地名が藤原忠実の五代前の藤原兼家が建立した堂舎の遺称地と考え、法興院と福勝院の関係性を推定している⁹⁾。

また、吉江氏は福勝院の成立が中世吉田地域の形成に関して重要だとしている。それは、福勝院建立を契機として、12世紀中葉以降、貴族の邸宅や堂舎が次々と建てられ、宗教的かつ政治的な空間が現出し、鎌倉期を通じて家の継承原理の下で伝領されるが、南北朝期の動乱を経てその多くは退転し、15世紀後葉、応仁の乱以降吉田社による一元的な支配が形成され、近世的景観の基礎となった、ということである。

以上が福勝院に関する主な既往研究である。福勝院の位置や規模に関しては史料や絵図に基づいた推定に加え、『京都坊目誌』に「或は云ふ近衛の第一中学校敷地中にあり」との記述から、現在の近衛中学校に存在していたと推定されているが、不明な部分が多い。詳細に関しては次項で述べるが、2020年度の調査では、福勝院の創建期である12世紀中頃にまで遡る遺構・遺物を検出することはできなかった。このことから、近衛中学校を福勝院の推定地とすることに疑念が生じた。そこで、この福勝院の推定地とされる吉田近衛町、つまり現在の近衛中学校周辺で行われてきた発掘調査の成果を見ていき、当地と福勝院の関係について考えていきたい。

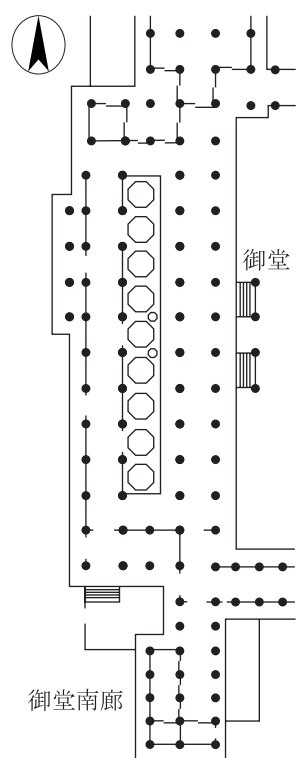


図1 『平家記』所収福勝院御堂（九輪阿弥陀堂）図面（筆者によるトレース）

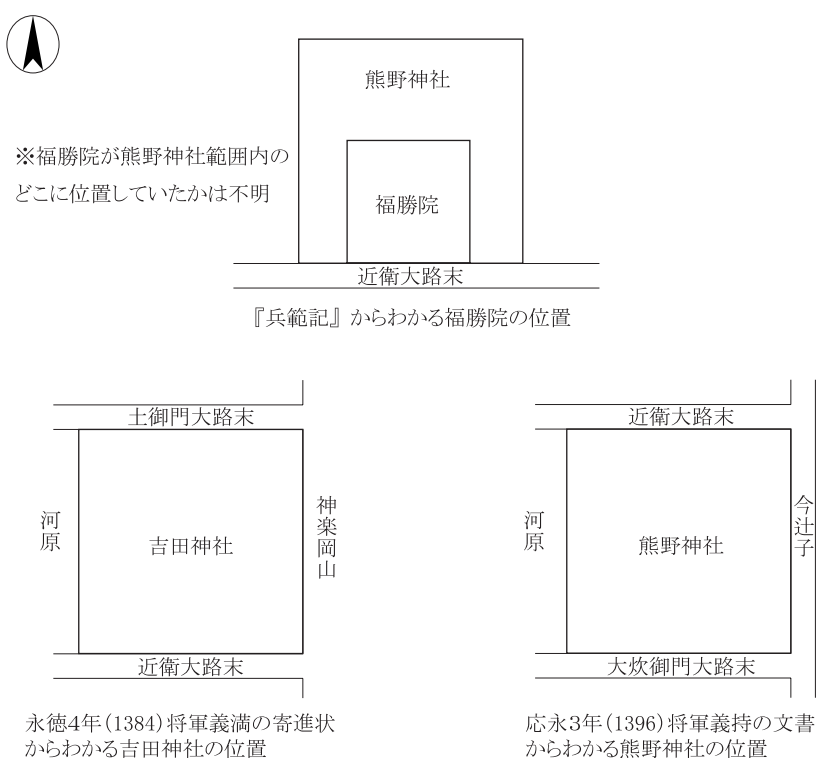


図2 各史料にみえる福勝院および関連寺社の位置関係のイメージ図

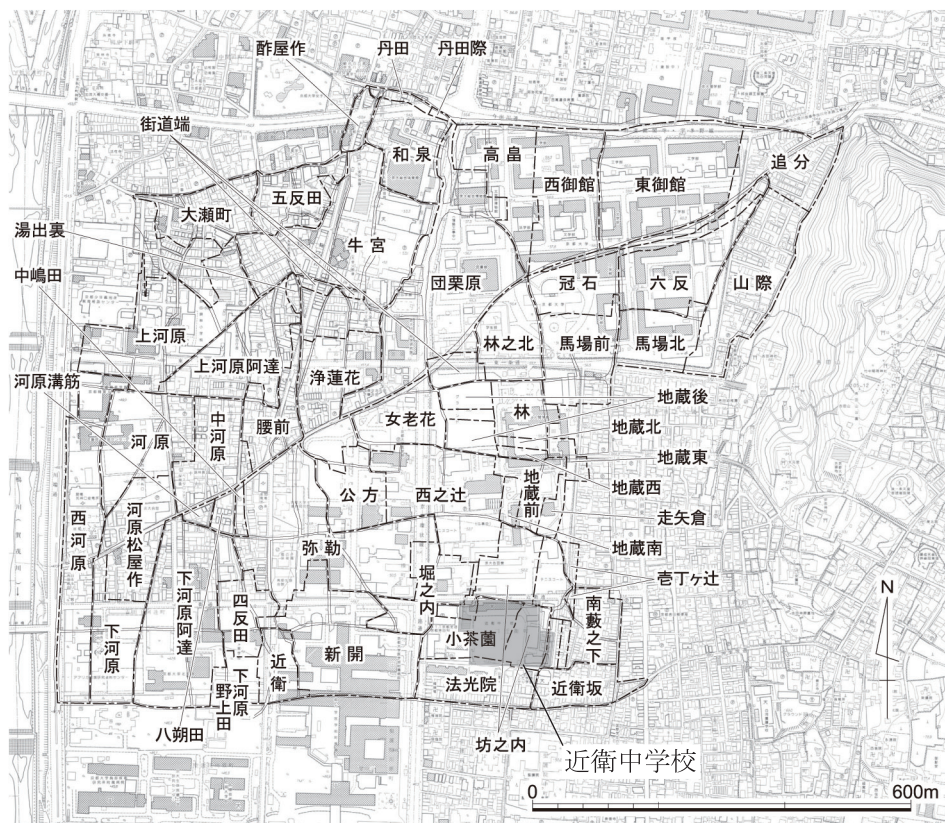


図3 『山城国吉田村古図』にみえる小字名（1：12,000）（吉江2006 図182より一部加筆）

2. 近衛中学校周辺の発掘調査成果（図4・5・6）

先に述べたように、近衛中学校の周辺は史料などから福勝院の推定地と考えられている。ここでは、近衛中学校の周辺で行われた発掘調査成果を概観していく。

1977年度に近衛中学校の北東部、現在の「きょうと留学生オリエンテーションセンターみずき寮」で調査が行われた¹⁰⁾(調査1)。調査では中世の東西方向のSD5や土坑1などを検出している。遺構の上部は後世の遺構により削平されており、底部がわずかに残存するのみで、詳細な時期についても不明である。遺構の方位は、東に対して南に約9度振れる。また、土坑1からは瓦類がまともに出土している。

1981年度には、近衛中学校の敷地内北東部で調査が行われた¹⁰⁾(調査2)。調査では、南北方向の溝124を検出している。遺構の時期は鎌倉時代である。この溝は、後述する2020年度調査の南北方向の溝300・368とつながると考えられる。調査区全体で検出された遺構は、鎌倉時代のものは少数で、多数は室町時代のものである。

1987年度には、近衛中学校の南西部で調査が行われた¹²⁾(調査3)。調査では東西棟の建物1、南北方向の溝2・265・297、東西方向の溝540などを検出している。溝540は東に対して約8度南に振れる。濱崎一志氏は、溝2は京都大学教養学部構内AP22地区調査¹³⁾で検出した南北方向の溝SD10・尊勝寺の西側溝¹⁴⁾と一直線でつながることから、今朱雀大路の東側溝となると考えている。

15)

2011年度には、近衛中学校の敷地内北西部で調査が行われた¹⁶⁾ (調査4)。調査では、鎌倉時代(13世紀中頃から後半)の集石土坑89～92や南北方向の溝166などを検出している。集石土坑89～92は、平面形はいずれも隅丸方形で、検出規模は短軸2.0～3.5m、長軸2.2～4.0m、深さ0.8～1.1mである。遺構の主軸方位は、わずかに東に振れるがほぼ正方位に並ぶ。また、溝166は、延長16m以上、幅0.5～1.0m、深さ0.4～0.45m、主軸方位は北に対して約4.5度東に振れる。調査区の南端では確認されていないことから、これより南側へは延長しないと考えられる。出土した遺物の上限年代は、平安時代以降では13世紀中頃である。

2016年度には、調査3の北側調査区の西隣で調査が行われた¹⁷⁾ (調査5)。調査では、鎌倉時代の東西棟の建物SB517、SK22などを検出している。SB517は桁行約4.2m、梁行約3.6mで東に対して約3度南に振れる。SK22は、完形の土器の埋納、木棺の痕跡、釘の出土などから土坑墓の可能性が指摘されている。出土した遺物の上限年代は、平安時代以降では13世紀前半である。

2019年度には、近衛中学校の敷地内南東部で調査が行われた¹⁸⁾ (調査6)。調査では、鎌倉時代(13世紀初頭)の南北方向の溝329や南北方向の柵6などを検出している。溝329は、延長約24.5m、幅1.5～1.8mで、主軸方位は北に対して約11度東に振れる。この溝329や柵6と同位置に、溝の掘り直しや堤状高まりの構築などが行われ、江戸時代まで継続して境界としての機能をもつ施設が存在していたと考えられている。この境界の西側では柱列や井戸などを検出しており居住施設の存在が考えられるが、境界の東側では平安時代末期から室町時代までの土坑墓が複数基検出されている。このことから、この境界の東西で土地利用の在り方に違いがあることが明らかとなった。出土した遺物の上限年代は、平安時代以降では、12世紀末である。また、調査では瓦類が

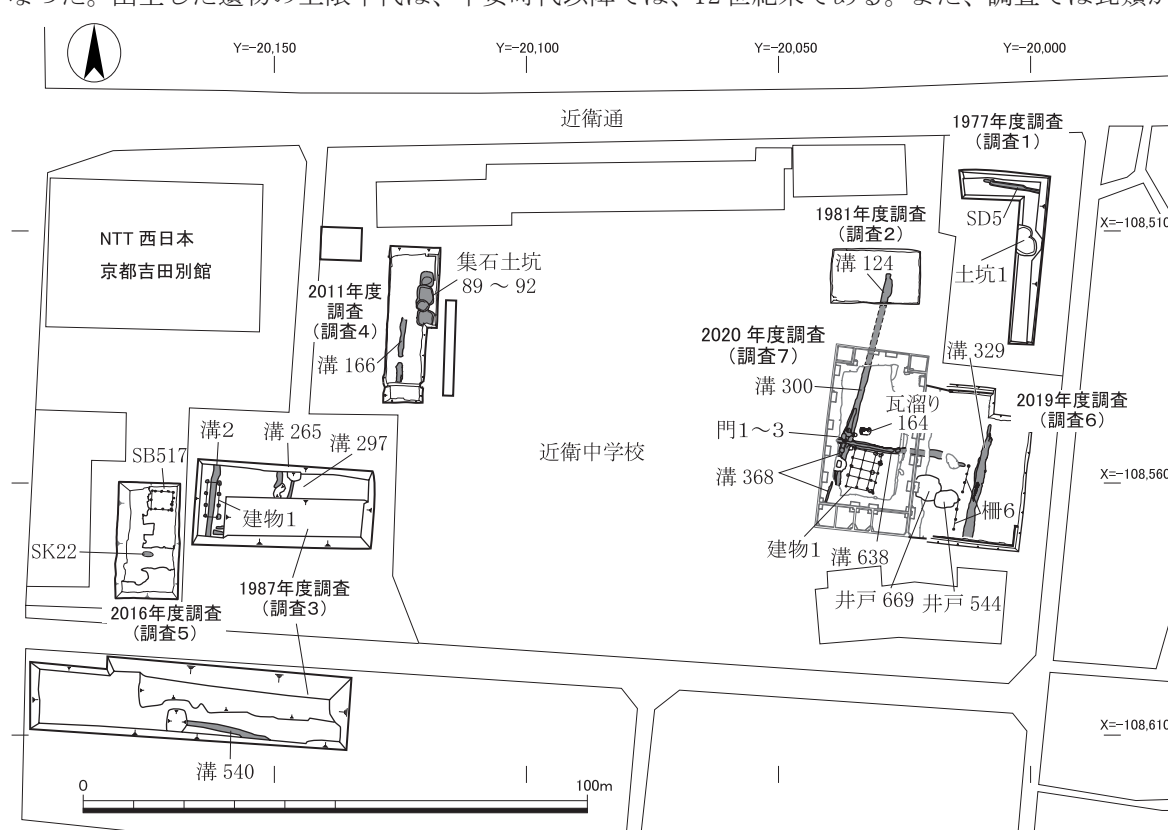


図4 近衛中学校周辺の調査で検出した主要遺構図 (1 : 1,500)

一定量出土している。

2020年度には、調査6の西隣で調査が行われた¹⁹⁾(調査7)。調査では、鎌倉時代(13世紀前半)の4×3間の南北棟の総柱建物1、門1～3、石組井戸544・669、南北方向の溝300・368、東西方向の溝638、瓦溜り164などを検出している。南北溝300・368は、調査2の溝124とつながると考えられる。遺構の主軸方位は、溝300・368それぞれ、北に対して約15度、約18度東に振れる。また調査6の溝329とほぼ平行し、これらの溝間の約24mに門1～3や建物1、石組井戸544・669、瓦溜り164などがある。門1～3は、いずれも掘形径0.7～1.1m、柱当り径0.4～0.5mほどで、このうちの柱穴1基の底部には大きさ約0.5mの地下式礎石が据えられている。石組井戸699は、掘形が径約5.5m、深さ約3.4m、用いられる石材は約0.5mである。瓦溜り164からは、平安時代末期から鎌倉時代の瓦が多量に出土している。

以上、近衛中学校周辺における発掘調査事例を見てきた。調査1では東西方向の溝を検出し、調査2・7と調査6ではほぼ平行する南北方向の溝を検出し、その溝の間には建物や門、井戸などを検出し、調査6の南北溝の東側では土坑墓を検出している。このことから調査6の南北溝329の東西で土地利用に変化がみられることがわかる。これらの調査で検出された遺構の時期は、出土した土師器から12世紀末から13世紀以降のものであることがわかった。調査7で検出した石組井戸は、掘形径が検出面で約5.5mで、用いられる石の大きさが0.5mを超えるものもあり、同時代の石組井戸と比べても規模が異なる²⁰⁾。

また調査1・6・7では、瓦が一定量出土している。このことから付近に瓦葺の建物の存在が推定され、寺院に類する施設が存在があった可能性は考えることができる。この瓦に関して、創建時期が福勝院よりやや遅れる栢杜遺跡八角円堂(久寿2年・1155年創建)の雨落溝から出土した瓦群と比較して時期を検討する²¹⁾。栢杜遺跡八角円堂雨落溝から出土した山城産剣頭文軒平瓦は、いずれも先端が丸みを帯びた花卉状のもののみであり、上原編年によると第Ⅳ期(12世紀中葉)に該当する²²⁾。また、上原氏は同八角円堂の軒平瓦はすべて半折曲技法であり、1点も折曲技法の瓦を含んでいない、と述べている²³⁾。一方、近衛中学校周辺調査地で出土した瓦の内、剣頭文軒平瓦はいずれも先端の尖ったもののみであり、また山城産の軒平瓦は折曲技法によるという点から上原編年の第Ⅴ期(12世紀後半から13世紀初頭)に該当すると考えられる。瓦の年代観から見ても、近衛中学校の調査地付近に瓦葺の建物が建てられたのは、福勝院よりも創建時期が遅れる栢杜遺跡八角円堂よりもさらに後ということとなり、福勝院の創建時期までは遡らないことがわかる。このように近衛中学校周辺の調査では、福勝院の創建時期である1151年にまで遡る遺構・遺物は皆無であるといえる。

3. まとめ

福勝院の推定地とされる近衛中学校周辺の発掘調査成果を見てきた。発掘調査では、平安時代末期から鎌倉時代の瓦が一定量出土しており、付近に瓦葺の建物の存在が考えられることや通常の宅地のものと比べて規模の大きい石組井戸を確認している。白河街区が六勝寺をはじめとして寺

院が多数造営される地域であることを踏まえると、こうした特異な遺構の存在や遺物の出土から何らかの寺院に類する施設の存在は窺うことができる。ただし、福勝院の創建期にまで遡る遺構・遺物は確認されていないため、現在の段階では近衛中学校を福勝院の跡地に比定することは難しい。藤原定家によって書かれた『明月記』安貞元年（1227）9月24日条には、「…、又見近衛末高陽院御堂、堂舎如昨今新造、…」とあることから、出土した遺物はこの時期に当てはまるとする考えもあるが、やはり創建期にまで遡る遺物が全く出土していないことから、これらの遺物だけでは、近衛中学校周辺で検出した遺構群を福勝院と関連があると評価するのは困難であろう。

また、近衛中学校の範囲に限定しても、その東と西とで遺構の検出状況や遺物の出土状況に違いがみられることが分かった。一つ目は、遺構の方位である。近衛中学校の東側では、区画施設と考えられる溝や柵は北に対して10度以上東に傾いているが、西側では、東に対して4度ほどである。調査1・2・6・7で検出された溝は、いずれも現在の近隣の道とほぼ並行していることから、平安時代末期以降の地割が現在まで踏襲されているものと考えられる。一方、調査4で検出した集石土坑はほぼ正方位で並んでおり、東西で遺構の傾きが大きく異なることが分かる。この遺構の方位の振れは、周辺の地形と関係していると思われ、北東の吉田山によって規制されて地割が行われたと考えられる。二つ目は、出土する遺物の内、瓦がまとまって出土しているのは東側に限られることである。こうしたことから、そもそも近衛中学校を一つの単位と考えるのではなく、その東と西とでそれぞれ別の施設の存在・地割等を考える必要があるのかもしれない。

また、福勝院が近衛大路末の北側に存在したことは『兵範記』などの史料から明らかだが、近衛大路末の位置がはっきりしておらず、さらに、福勝院が近衛大路末の東西のどこに位置していたかを示す史料もない。『京都坊目誌』には、「古老云ふ字近衛学校建築以前一堆の地あり。茶藪たり此地乃ち稜也と」とある²⁴⁾。しかし、これまで述べてきたように、近衛中学校周辺調査では福勝院創建期にまで遡る遺構・遺物は検出されていない。福勝院の跡地をどこに比定するのかについては、これまでの発掘調査成果から考えて、「近衛中学校周辺」から立ち戻り、改めて考え直す必要があるのではないだろうか。

註

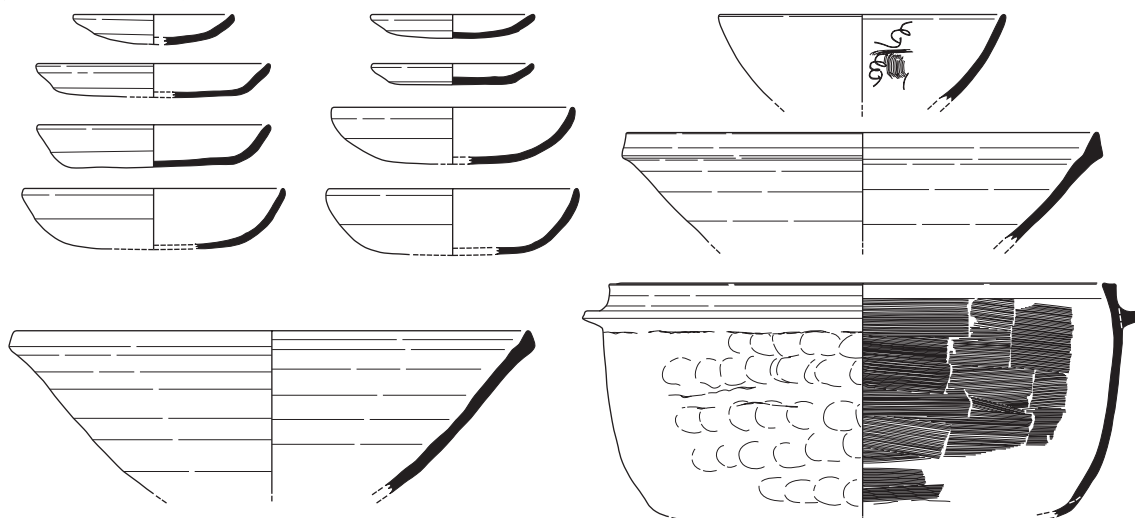
- 1) 『兵範記』久寿2年12月17日条 「…、自近衛末東行、入御々堂南西門、…」
- 2) 同上「白川御堂、今熊野領已四至内也、…就中上皇御所近隣、…」
- 3) 『勘仲記』弘安10年4月15日条 「…、仏具等所借渡福勝院也、余下知之…」
- 4) 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年
- 5) 同上
- 6) 川上貢・泉拓良「第1章 構内遺跡と調査の概略」『京都大学構内遺跡調査年報』1977年
- 7) 濱崎一志 「第4章 白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』1991年
- 8) 吉江氏は、文明11年（1479）の「吉田社雑掌□□（貞継カ）言上状案」に吉田社領の袋図師名が「東限法興院、西限阿立岸、南限近衛、北限鷹司」に位置していることから、法興院という地名が15世紀後葉まで遡る、としている。

- 9) 吉江崇「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』2006年
- 10) 「吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1978年
- 11) 「福勝院跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 12) 『吉田近衛町遺跡 京都文化博物館調査研究報告 第4集』京都文化博物館 1989年
- 13) 五十川伸矢・飛野博文「第2章 京都大学教養部構内AP22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1982年度』1984年
- 14) 「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告 1976-Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課 1977年
- 15) 註7)に同じ
- 16) 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 17) 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年
- 18) 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2020年
- 19) 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年度末刊行予定
- 20) たとえば平安京右京二条二坊十町で検出した鎌倉時代の石組井戸は、掘形径1.6～1.7mで、用いられる石の大きさも約0.3mである。「右京二条二坊（3）」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年
ただし、2020年調査で検出した石組井戸の掘形径が大きいのは、地盤が軟弱な砂地であったためだと考えられ、下層の粘土層に変わるあたりでは掘形径は縮小し、約3.0mとなる。
- 21) 『柏杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年
- 22) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号 1978年
- 23) 上原真人「秀衡の持仏堂：平泉柳之御所遺跡出土瓦の一解釈」『京都大学文学部研究紀要』第40号 2001年
- 24) 図3の字名を見ると、近衛中学校西半部は小茶園にあたる。

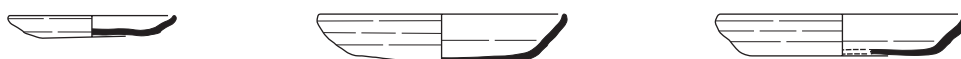
参考文献

- 『京都坊目誌』上巻之廿七（吉田篇）（『新修 京都叢書』第十九巻）臨川書店 1968年
- 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号 1978年
- 上原真人「秀衡の持仏堂：平泉柳之御所遺跡出土瓦の一解釈」『京都大学文学部研究紀要』第40号 2001年
- 川上貢・泉拓良「第1章 構内遺跡と調査の概略」『京都大学構内遺跡調査年報 昭和51年度』1977年
- 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年
- 杉山信三『よみがえった平安京』人文書院 1993年
- 濱崎一志「第4章 白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ－京都大学病院構内遺跡の調査－』1991年
- 吉江 崇「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』2006年

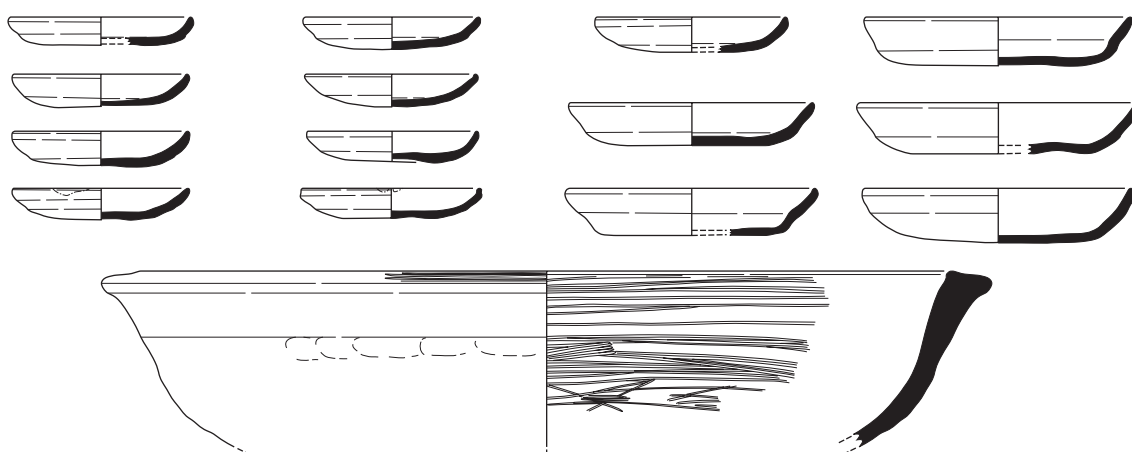
調査4出土土器類



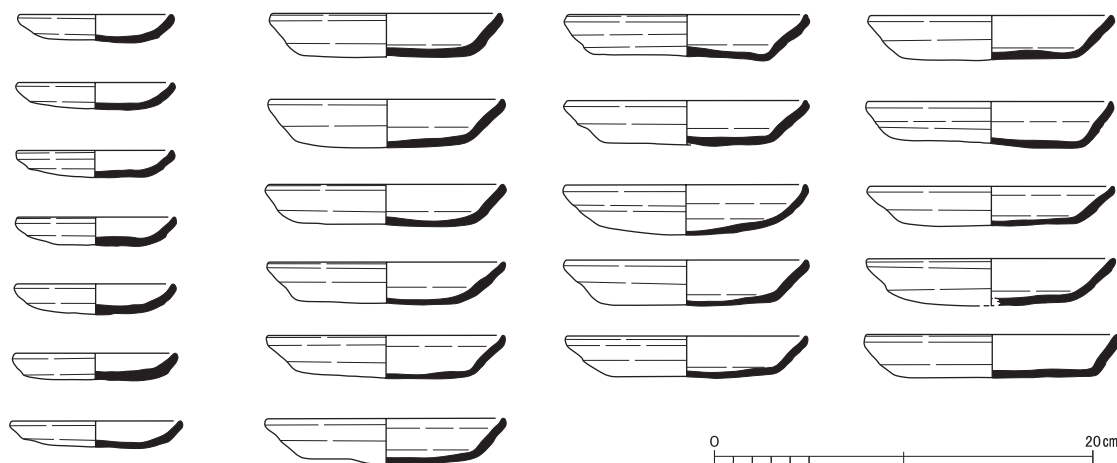
調査5出土土器類



調査6出土土器類



調査7出土土器類



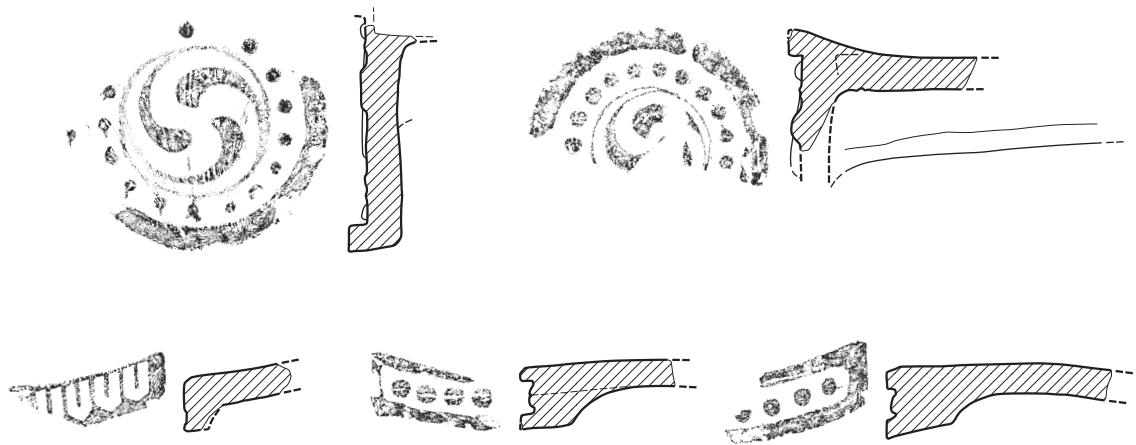
0 20cm

図5 近衛中学校周辺の調査で出土した土器類実測図（1：4）

調査1出土瓦類



調査6出土瓦類



調査7出土瓦類

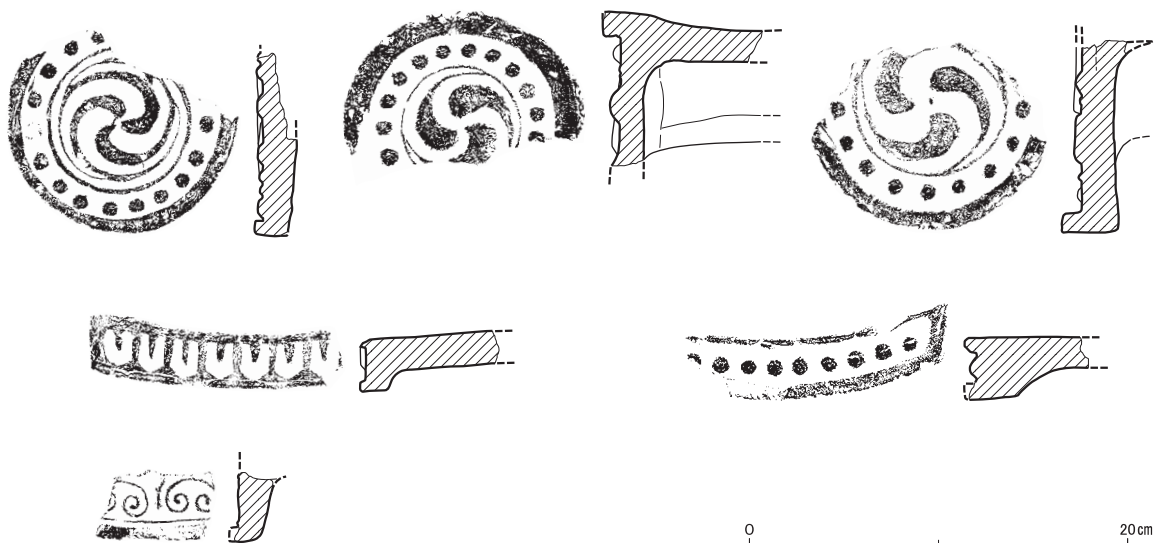


図6 近衛中学校周辺の調査で出土した瓦類実測図・拓影（1：4）

北山七重大塔（特別史跡・特別名勝金閣寺庭園内）

土壇（亀腹）毀損問題について

－令和２年度25次調査の問題点－

東 洋一

1. はじめに

2021年3月31日、北山大塔土壇跡を再調査した報告書である「Ⅲ特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）」収録の『京都市内遺跡発掘調査報告 令和２年度』（京都市文化市民局 2021年。以下『25次調査報告書』とする）が刊行された。

また、それとは別に、大塔土壇上面の被熱面上面から新たに検出された、炭化した木片約20個体からパレオ・ラボ社に委託して放射性炭素年代測定を実施した報告「Ⅴ－1 特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園（20A006）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和２年度』（京都市文化市民局 2021年。以下、『化学分析報告書』とする）も同時に刊行された。

奇しくも翌日の4月1日、『京都新聞』朝刊に『金閣寺発掘調査 庭園土壇に鎌倉期木片 科学調査で判明 伐採は室町期可能性も』とするタイトルの日山正紀記者によるスクープ記事が掲載された。

この記事は前記2冊の報告書の要約で、3月31日発行報告書の内容を事前にキャッチしていたものと思われる。

記事には京都市文化財保護課のコメントを交えて「分析結果によると、木片の年代は1225～75年の範囲に収まる確率が95.45%と判定された。市は『木は焼け、年輪や樹種は分からない。伐採や使用の時期になると、鎌倉期にとどまらず100年以上を経た室町期の可能性もありうる』という。」としている。このコメントは限りなく足利義満建立の北山大塔建立期に合致することとなる。

また、土壇についても「府や市が最終的にまとめた発掘調査報告書では、市埋蔵文化財研究所が軟質な盛り土で『大重量を支える基壇とは考えにくい』とした土壇を再評価した。外部有識者の見解をもとに『堆積はむしろ密で、土質の柔らかさは後世の風化による』と判断した」と報道した。これは従来の研究所見解を覆したことを意味する。

また、やや遅れて4月26日付け『朝日新聞』朝刊にも、小松万希子記者による『金閣寺の『幻の塔』の一部か 境内土壇から鎌倉期の木片』という見出しの記事が掲載された。

それによれば、木片の「発見場所の盛り土（土壇）が、塔の土台だった可能性も強まってきた」とし、京都市文化財保護課馬瀬智光氏の「断定は難しいが、北山大塔の一部だった可能性もある」とする取材コメントが掲載され、25次調査外部有識者を担当された菱田哲郎京都府立大学教授【考古学】の「もともとが固くしまった土だったのならば、今回の木片の発見もあり、土壇が大塔の土